

ゴール要塞（世界遺産）（スリランカ南部州の港町ゴール）

ゴールの旧市街と要塞（ゴールのきゅうしがいとようさい）は、スリランカ南部州の港町ゴールに築かれた要塞と、その城壁内に形成された歴史地区を対象とする UNESCO の世界遺産リスト登録物件である。

歴史

ゴールは古くから交易拠点となっていたと考えられ、イブン・バトゥータの著書にも見られるが、ヨーロッパ人がゴールに到達したのは 1505 年のことである。最初に到達したのはローレンソ・デ・アルメイダ（英語版）率いるポルトガル船だったが、これは偶発的なものだった。1507 年に貿易が始まり、ポルトガル人たちは拠点を築き、強化していった。1625 年には 3 つの稜堡とサンタ・クルズ砲台が設置された。これは現在残る要塞よりもずっと簡素なものであったが、ゴール要塞の成立と見なされている。

このポルトガルの拠点は 1640 年にヤコブ・コステル率いるオランダ軍の攻勢によって陥落し、オランダ海上帝国の一部となった。オランダはポルトガル人の都市計画を土台にしつつも、多くの点で変更を行い、現在残るゴールの基本形を作り上げていった。旧市街を囲む城壁は 1663 年に築かれたものであり、1669 年には主要な 3 つの稜堡を含む要塞が完成した。オランダ語でステル（星）、ゾン（太陽）、マアン（月）と名づけられたそれらの稜堡は、今もそれぞれスター、サン、ムーンと呼ばれている。

18 世紀になると勢力を伸ばしていたイギリスへの警戒からさらに 11 の稜堡が増やされるなどの強化がなされたが、1796 年にイギリスの手に落ちた。しかし、無血譲渡であったために、当時の建造物群の多くが破壊されることはなかった。さらに、19 世紀後半にはコロンボの交易拠点としての重要性が増したことで、ゴールは地方商業の拠点に過ぎなくなりましたが、それによってかえって街並みは良好に保存された。

登録対象

ゴール市内は大きく分けると 3 つの地区に分類される。半島部に形成された要塞が残るフォート・エリア、海岸や国道沿いに見られるムスリム商人の多い商店街エリア、仏教寺院が多く見られる丘陵部の住宅地エリアである。このうち、世界遺産対象地域になっているのはフォート・エリアである。

フォート内部はオランダ植民都市にしばしば見られる格子状の街路が走るが、地形に合わせて若干の変形が見られる。オランダ人やイギリス人が居住してきたことから、ゴール市内のキリスト教会 4 つのうち、3 つがフォート・エリアに残っている。オランダ植民都市時代に築かれたオランダ改革派教会（1752 年）、イギリス国教会に属する諸聖人教会（1871 年）、そしてメソジストの教会堂である。かつてはポルトガル植民都市時代に築かれたカトリックの聖堂もあったが、17 世紀にオランダによって取り壊され、その跡地には仏教寺院のウィクラマシンハ寺院（1889 年）が建っている。

現在のフォート・エリア内にはムスリムが多く住む。1999 年の統計ではフォート・エリアの住民 2197 人中、ムスリムは 1009 人で、シンハラ人の 1159 人と大差がない。これは伝統的に住んでいるムスリム（スリランカ・ムーア）のほか、スリランカ独立後、ヨーロッパ人やバーガー人の外部への流出によって空いた住居に移住してきた者たちが含まれている。そのため、モスクもフォート・エリア内に 4 つあり、そこにはオランダ植民都市時代に起源を持つメーラ・モスク（1904 年）も含まれる。以上、キリスト教、仏教、イスラームのそれぞれの施設は残るが、ヒンドゥー教の寺院はない。

旧ゴール総督府の建物は民間企業に委譲されたが、今も残っている。ほかにも旧兵舎は郵便局、旧オランダ軍病院は地方役場、旧商業銀行はセイロン商業銀行など、用途の転用はあっても、オランダ時代の建造物群はいくつも残っている。また、フォート内に残る住居群にはオランダ式の様式が持ち込まれたが、ベランダや中庭の配置などには、地元の様式との融合が見られると指摘されている。

オランダからの影響で重要なのは排水施設である。フォートの旧市街には海拔 0m 以下の地域があるため、生活排水の処理は重要な課題となった。オランダは母国の経験を生かし、潮の干満を利用する排水システ

ムを形成した。イギリスはこのシステムを発展させ、1888年には稜堡のひとつであるトリトン・バスチオン近くに風車を設置した。

Wikipedia

